

定番教材はどうなるか

——次期学習指導要領実施後の文学

野中 潤

二十一世紀に入ってまもなく、国語教科書から夏目漱石と森鷗外が消えたという話でメディアが賑わったことがあった。いわゆる「ゆとり教育」をスローガンとする学習指導要領が小学校と中学校で施行された二〇〇二年の九月に、文芸雑誌『文学界』が「漱石・鷗外の消えた『国語』教科書」という特集を組んだのがきっかけだ。これはただし、中学生用の教科書教材に限った話であり、高等学校の教科書においては「こころ」も「舞姫」も消えたわけではなかった。それど

ころか、現在に至るまで「夢十夜」や「高瀬舟」などを含めた漱石・鷗外の教科書教材としての採録は続いていて、今のところ消える気配はない。夏目漱石も森鷗外もいまだに「定番作家」の地位を維持し続けているのは周知のとおりである。ただし、こうした状況が永遠に続くはずはないので、いずれ何らかの変化が起こるに違いない。たとえば、新しい学習指導要領において、高等学校国語科の科目構成が刷新される可能性が高まっている。二〇一六年三月に文部科学省の教育

課程部会国語ワーキンググループが公表した「高等学校国語科の改訂の方向性素案」では、「現代の国語」と「言語文化」という必修科目と、「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」といった選択科目（いずれも仮称）で教育課程が編成されることになっている。かりに素案の通りの科目構成になった場合、高校二年ないしは三年で学習する「山月記」や「こころ」や「舞姫」は、「文学国語」という選択科目の一つに押しやられることになる可能性が高い。だとすれば、大多数の学校で「文学教育」が選ばれない限りは、実質的に文学教材の存在感が低減し、場合によってはフェイドアウトしていくことになりかねないわけである。高校一年生で学習する「羅生門」の居場所も、「実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目」として必修になっている「現代の国語」には確保でき

そうもないので、「上代（万葉集の歌が詠まれた時代）から近現代につながる我が国の言語文化への理解・関心を深める科目」としての必修科目「言語文化」の教科書に採録されない限り、選択科目の「文学国語」で扱うしかない。そういう予測が当たってしまった場合、「羅生門」や「山月記」などを読まずに大学へ進学する高校生が大量に出現することになるわけだ。小説を素材として作られてきた大学入試センター試験が廃止され、街並み保存地区の景観ガイドラインに関するチラシとか駐車場の契約書などの資料から情報を読み取って分析や考察を加え、それを表現する能力を問う「大学入学希望者学力評価テスト（仮）」（いわゆる「新テスト」）が始まったら、進学校を中心に「文学国語」を選択するインセンティブは失われる。「多様な文章等を、多角的な視点から理解し、創造的に思考して自分の考えを形成し、論理的に表現

する能力を育成する科目」であるという「論理国語」や、「表現の特徴や効果を理解した上で、自分の思いや考えをまとめ、適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目」としての「国語表現」のように、新テストが重視する論理性や思考力、あるいは新しい学習指導要領が重視する思考力・判断力・表現力などを育成することに適応的な科目が選択されやすくなることは火を見るよりも明らかだ。

いわゆる「定番教材」誕生の背景について、サバイバーズ・ギルトという観点からこれまで何度も論じてきたのだが、もはや定番教材は、行列ができる店であるという評判が行列の原因になると同じように、定番教材であるがゆえに定番教材であり続けているという同語反復的な状況に遷移しているようにも見える。だとすれば、行列ができるという基礎的な条件を損なう選択科目「文学国語」の

出現によって、定番教材が定番であり続けることが困難になる可能性が高い。漱石と鷗外が国語教科書から消えるという二〇〇二年の騒ぎだけではなく、文学教育の危機はぜひぶん前から何度も叫ばれ続けてきた。もはや「オオカミが来た」というイソップ童話の少年の叫びのようにな、「またか」と受け止められている節がなきにしもあらずである。童話と同じように、いよいよ本当にオオカミが来るという時になっても誰も本気にしなくなっているのだとしたら、これほど滑稽な悲劇はない。

もちろん、教育が変わっていくという状況を逆手にとって、定番教材の新たな可能性を（もしかすると延命措置のようなものかもしれないが）模索することはできる。「こころ」や「舞姫」のような定番教材は、長年にわたり定番教材であり続けてきたことで多くの二次資料の蓄積を生み出してきた。近隣の図書館に行

けば、夏目漱石や森鷗外の研究書が何冊も、あるいは何十冊も配架されているだろうし、インターネットで検索すれば数多くの関連記事がヒットする。その中には「Yahoo」知恵袋のようなサイトもあり、「舞姫の太田豊太郎は、ドイツで書かれための日記を買いましたが、白紙のまま日本に帰って来ていますよね。日記を書けなかった理由の候補を色々あげてますが、結局どうして豊太郎は日記を書けなかったのでしょうか？」などという質問と、それに対するさまざまな人物の回答を読むことができる。もちろん、国会図書館デジタルコレクションで「舞姫」を収録した『水沫集』（春陽堂、一八九二年）を閲覧することもできるし、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「J-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）」で研究論文を読むこともできる。神奈川近代文学館のWEB版夏目漱石デジタル文学館のように、豊富な画像

データで文豪の原稿や遺品を閲覧して調査できるサイトもある。「論理国語」で育成されるはずの「多様な文章等を、多角的な視点から理解し、創造的に思考して自分の考えを形成し、論理的に表現する能力」は、定番教材とそれをめぐる複数の資料の読み合わせと分析・考察によって育成することも十分に可能である。『文学界』の特集に収録された「現行の『国語』教科書をどう思うか？」というアンケートでは、松本徹、清水良典、出久根達郎などが教科書教材の画一化を憂いているのだが、恐るべき画一化によって広い世代の広範な人びとによって読み継がれてきた定番教材は、それゆえに新しい学習指導要領に書かれた「複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること」という課題に対応するための格好の教材であるという見方もできるのである。

に足を運んで事物に触れ、学びを深める調べ学習の手段にも事欠かない。たとえば、神奈川近代文学館を訪ねて常設展示を見たりバックヤードを見学したりして、芥川龍之介や夏目漱石の遺品や生原稿に触れること、まもなく開館する新宿区立漱石山房記念館や文京区立森鷗外記念館などで文豪に関する幅広い資料や情報に触れること等々、実物を通したりリアルな学びの機会も、読み継がれてきている人気作家なればこそ、豊富に用意されている。定番教材であるがゆえにコンテンツとしての付加価値が高まり、付加価値が高まるがゆえにコンテンツとしての強度が増していき、定番の地位がさらに確固たるものになっていくという正の循環を持続すること（＝古典化・聖典化？）も不可能ではないのだ。こうした環境を用意してくれている基本的な条件が、初等中等教育におけるこれからの教育改革によって損なわれていくのかどうかとい

う問題は、これら定番教材および文豪の研究によつて社会的な価値の一部（あるいは大半？）を担保している日本近代文学研究にとつても、教材研究の大半を文学研究によつて成立させてきた国語教師にとつても死活問題であると言えよう。

ところが、そういう危機感を日本近代文学や国語教師が十分に持っているかどうかという話になると、はなはだ疑わしいと言わざるを得ない。「オオカミが来た」とは言うけれど、本当にオオカミが来るとは思っていないオオカミ少年的な研究者が、「文学の危機」や「文学教育の崩壊」を繰り返し叫び続け、その割に危機の到来に正対することなく、蝸壺的な世界の中でぐるぐると堂々巡りをしてきたというのが、ここ数十年のこの業界の実態だったのかもしれない。もちろん、こうした批判は、ブーメランのように自分の身にも突き刺さってくるわけで、果たして自分は何をなすべきか、改めて来

し方行く末を考えざるを得ないというのが、日本近代文学の研究者を志しながら中等教育の現場で長く国語教師として教壇に立ち続け、今は大学の文学部国文学科で国語教育学研究室の教員をしている私の現況である。

国文学研究誌が次々に廃刊に追い込まれ、文芸雑誌の売り上げも芳しくない。一般社団法人日本雑誌協会が公表しているデータによると、今年一月～三月までの印刷証明付き発行部数は、『群像』六千三百部余、『すばる』六千部、『新潮』二万二千四百部、『文學界』一万二千部である。最も多い『新潮』ですら月単位で計算した場合、一万部に達しないわけだ、公的な機関の定期購読分を除いた一般読者による購買部数はきわめて少ないと考えざるを得ない。文芸雑誌を毎月読んでいる国文学者や国語教師は、おそらく絶滅危惧種なみの個体数にとどまるだろう。

しかしその一方で、アニメ映画のノベライズや映画の原作小説が売り上げを伸ばし、文豪がコンテンツとして消費され、ネット詩人やネット歌人の作品がウェブ空間を飛び交っている。漱石山房記念館に実物大の書齋が作られたとすれば、そこに大阪大学の石黒浩教授監修の「漱石アンドロイド」が置かれなくても限らないし、ヴァーチャル漱石山房がウェブ空間に作られ、新宿の記念館に行かなくても、いつでもどこでもVRゴーグルで漱石山房の内部を探索できるようになるかもしれない。そういう現実には積極的にコミットすることで失われるものがあると恐れるよりも、むしろそこに身を投じるような蛮勇が、文学研究者にも国語教師にも、そして国語教育学者にも求められているのではないか、というのが今の私の実感である。

（のなか・じゅん）